

# 「社会福祉援助技術現場実習」における 知識・技術・態度の評価要因に関する考察

—社会福祉実習施設・機関による実習評価表から—

大月 和彦 \*森久保 俊満 \*\*荻野 剛史

## I. はじめに

社会福祉援助技術現場実習(以下、「現場実習」という)の目的<sup>1)</sup>は、社会福祉援助技術の中心課題である知識・技術・態度を、日々の授業である学内学習と結びつけて体験的に修得することである。

従って、現場実習におけるそれらの評価要因がどのような要因であるかは、今後の実習教育を考えるうえで重要な意味を持つと言える。

実習評価に関する研究は近年多くなってきているが<sup>2),3),4)</sup>、本研究では、実習評価における知識・技術・態度の修得に関する評価項目の評価を通じて実習種別間における評価の傾向を検討する。

## II. 対 象

本研究が、社会福祉現場実習での知識・技術・態度の評価要因を考察する上で、児童福祉関係施設の児童養護施設、母子生活支援施設、児童相談所、児童自立支援施設の4施設での実習を研究対象とした。そして、社会福祉学科を設置するA大学(4年制)において、現場実習の科目を履習している学生のうち、児童領域の施設・機関で1999年7月26日から

9月24日までの間に、児童養護施設6施設、母子生活支援施設4施設、児童相談所6機関、児童自立支援施設3施設の合計19施設・機関の23名を調査対象とした。

## III. 研究方法

研究方法としては、学生が行った実習施設・機関からの評価表と総合所見のコメントを整理し、それぞれの施設・機関の実習指導者が、学生の実習に関する評価において何を重要視しているかその傾向について分析する。

児童領域に関する施設・機関の内訳は、母子生活支援施設4人・児童養護施設6人・児童自立支援施設3人・児童相談所10人である。

実習評価の分析に当り、各施設・機関の種別ごとに要求している重きがどこにあるのか、社会福祉援助技術における「知識」・「技術」・「態度」の観点から分析を試みた。

次に、この分析結果から、実習教育の中でも、特に事前学習のあり方を探ることを目的とした。なお、評価表の評価はA・B・C・D評価となっているが、A=4点・B=3点・C=2点・D=1点として換算し、各項目ごとに各施設・機関の種別ごとに平均値を出して比較した。この数値の一覧は、表1のとおりである。

\* 森久保 俊満 東海大学健康科学部社会福祉学科

\*\* 荻野 剛史 社会福祉法人 峰延会

表-1 施設・機関種別の評価項目毎の平均値一覧表

施設・機関 評価項目	母子生活 支援施設	児童養護 施設	児童自立 支援施設	児童 相談所	総合平均
1. 「知識」 1.1施設・機関の 基本的理解	3.5	2.8	3.3	3.3	3.2
2. 「技術」 2.1利用者との関係形成・ 利用者理解	3.5	3.0	3.6	3.1	3.3
2.2記録	3.7	3.1	3.3	3.1	3.3
3. 「態度」 3.1職員との関係	3.5	3.0	3.0	3.3	3.2
3.2自己覚知	3.2	3.3	3.6	3.2	3.3
3.3学習施設・機関に おける態度	3.7	3.1	3.3	3.1	3.3
4. 施設職員の所見による 「総合評価」	3.5	2.8	3.6	3.1	3.3

※1. A大学 社会福祉学科1999年度の夏休みに行われた実習生の評価である。

#### IV. 分析と結果

##### 1. 知識に関する評価について

知識に関する評価については、施設の学生に対する評価のうち施設・機関の基本的理解についての評価を資料として分析を試みた。

施設・機関ごとに評価結果をみていくと、母子生活支援施設においては、3.5と高い数値を示した。次に、児童相談所の3.3、児童自立支援施設の3.3と続く。

そして、領域の中でもっとも低い数値を示したのは、児童養護施設の2.8であった。

このことから事前学習としての専門知識について最も厳しく要求している施設は、この研究対象においては、児童養護施設である可能性がある。

さらに、児童養護施設が実習生に求めていることと、大学における児童福祉に関する教

育との乖離が他種施設よりも大きい可能性がある。

このことは、児童養護施設における実習の大多数が歴史的に見ても保育士養成の実習であり、それをベースとして評価された場合は、保育士としての知識を学んでいるわけではないので、現場実習として行った学生にとって、低い評価が出るという、仮説が導き出されるかもしれない。このことから、この傾向は、技術評価項目においても同様の傾向が表れることと予想される。

##### 2. 技術に関する評価について

###### 2-1.利用者との関係形成・利用者理解について

技術評価は、実習生がいかに関係形成・利用者理解について、自分の経験や感情の枠にとらわれず、相手の意見を聞き、接するスキルがあるかどうかということであり、利用者のニーズを総合

的に判断・理解ができていないかということである。

技術の評価がもっとも高い数値を示したのは、児童自立支援施設の3.6で、次いで母子生活支援施設の3.5であり、児童相談所の3.1と続き、もっとも低い数値を示したのは、知識項目と同様に児童養護施設の3.0であった。

## 2-2. 実習記録の評価について

次に技術面における評価の二つ目として、実習記録の評価について分析した。

そもそも、実習における記録というのは、実習中にいろいろと得られた知識や新たな課題または反省などをまとめ、事後学習に役立つようにすることを目的としている。これらは、実習施設側と実習生とのコミュニケーションを通して、ソーシャルワークの技術をも、身につけるものであり、ただ単に記録技術のテクニックを求めているものではない。

このことに関して分析の結果をみると、母子生活支援施設が3.7と高い数値を示したのである。次に児童自立支援施設の3.3、児童養護施設の3.1、児童相談所の3.1という結果になり、母子生活支援施設で実習を行った実習生の記録技術は、児童領域の中ではいちばん高得点を得ている。また、ここでも児童養護施設は低い値を示している。

## 3. 職務態度等に関する評価について

### 3-1. 職員との関係についての評価分析

職務態度については、実習生が、実習先である施設や機関における実習先の指導者や他の職員との関係は実習だけにとどまらず、社会においての人間関係の形成の場であり、社会福祉の専門職となる上で非常に大切なことである。実習先で自分から進んで指示や助言を求められらるか、実習指導者の説明や助言、

指導などをきちんと聞けるかなど福祉専門職をめざす学生にとっては、将来組織の一員として働くにあたって、基本的なことであるが、重要な項目である。

調査からは、母子生活支援施設が3.5と高い数値を示した。次に児童相談所の3.3、児童養護施設の3.0、児童自立支援施設の3.0と続く。また、領域の平均としても3.2という数値が導き出された。なお、ここでも児童養護施設における評価が最低値を示している。

### 3-2. 自己覚知について

自己覚知とは、施設や機関の実習先で自分が利用者や実習指導員等職員との関係を通して、自分の得意な点と不得意な点に気付くとともに、事後学習として、今後の自分における課題は何かについて考えることである。

この調査からはもっとも高い数値を示したのは、児童自立支援施設の3.6であり、次いで児童養護施設の3.3、母子生活支援施設の3.2、同じく児童相談所の3.2という結果となった。

領域でもっとも高い数値を示した児童自立支援施設は、社会問題ともなっている非行少年問題や、学校でのいじめについて、クローズアップされている影響もあって、学生の間でも関心の高い実習先の一つである。児童自立支援施設を実習先として希望した学生は、少なくとも入所者の入所経緯を考え、最低でも自分の感情をコントロールする努力が必要である。このことに関して、実習先での評価が高かったことは、児童自立支援施設で実習を行った学生への事前学習がいかなる影響を与えるかということについて、今後注目したい。

### 3-3. 実習施設・機関について

実習における実習生の義務の一つとして守秘義務がある。施設や機関における利用者においては、人権に触れる職務が行われている。職務を行うにあたり、個人のプライバシーが

扱われているため、実習生もケース学習などを通して見聞きすることになるので、実習先で知り得た情報や個人のプライバシーは、利用者の人権を守る上からも実習生に対しては、特に厳しい守秘義務が求められている。

二つ目に実習を行うに当たり、泊り込んで実習を行う学生や通って実習する学生、どちらも出勤時間を守ることはもちろんのこと、規則・約束を守ると言うのが、機関における態度評価になると考える。

調査の結果、母子生活支援施設3.7、児童自立支援施設3.3、児童相談所3.1、児童養護施設3.1と続く。

この結果をみると、通勤実習である施設としての母子生活支援施設は、3.7と高い数値を示しており、実習生の規則正しい実習姿勢が伺えた。また、利用者や実習指導者、職員に対する言葉遣いや挨拶など社会人としてのマナーの良さも実習指導者の所見から伺えた。

そして、領域の中でもっとも低い値を示した児童養護施設の実習生は、泊り込み学習が多く、実習期間中、24時間、公私の区別がはっきりしないような生活で、精神的、肉体的な負担が大きいために出勤時間を守ることができなかったのではないかと考えられる。また、実習先の実習指導者等職員や入所者に対する言葉遣いなどの評価が低かったのは、指示が出されても専門用語が分からないという点に加え、分かったとしても実行する技術を習得していないことが実習指導者の所見から垣間見られた。また、児童養護施設が低い数値を示したのは、児童養護施設においては、教育やしつけを通して社会性を育てることに重点をおいているので、学生に対する評価も基本的な物事を守ることに付いて等、厳しい視点からの評価となったものと考えられる。

#### 4. 総合評価について

実習における各施設・機関からの実習生の

総合評価についての分析を行った。その結果次のような結果となった。

児童自立支援施設3.6と領域中でもっとも高い数値を示し、次に母子生活支援施設3.5、児童相談所3.1、児童養護施設2.8と続いた。低い値を示した児童養護施設は、全体的にみても評価が低いことから分かるように、他職種である保育士実習と実習が重なるために評価基準が社会福祉士養成と保育士養成と明確に分けての評価であるかどうか今後検討する必要がある。

なお、総合所見を整理してみると各施設・機関においても実習生の積極的な実習姿勢についての評価コメントや入所者との関係に対するコメントが多く、おおむねPositiveな評価であった。その反面、実習計画がきちんとしていないという評価コメントをもらった実習生は、もっと謙虚に現場で学ばせてもらうという姿勢が欲しいという(あくまでも実習生は職員でなく学生であるという自覚をもってほしい)、実習姿勢に対するコメントもあった。このことは今後の研究課題であり、実習に臨む態度についての事前学習指導の強化を必要と考える。

#### 5. 研究の限界性と今後の研究課題

児童領域だけでの分析であったためにサンプル数が少なく、分析結果については慎重な扱いが必要であるが、以下について今後課題を述べる。

##### 5-1. 児童養護施設における評価について

調査対象とした4施設の中で、児童養護施設における評価がやや低い傾向を示している。児童養護施設は保育士実習も受け入れているが、実習施設側が社会福祉援助技術現場実習として受けとめているか如何により実習生の評価が大きく分けられると言うことが、仮説として挙げられる。

## 5-2. 事前学習について

事前学習においては、実習先の施設・機関における役割や機能を自分が実習に行く施設・機関だけでなく、それに関連する施設・機関をも明確に理解しておく必要があると考える。学生へ事前学習の重要性をいかに理解させるかが、今後の実習教育の上で課題である。

また、母子生活支援施設や児童自立施設における評価では、事前学習が影響したと予想される結果がみられたが、事前学習と配属実習中の評価との間の因果関係について今後の研究課題としたい。

### 註

- 1) 近年、社会事業学校連盟主催による社会福祉教育セミナー等では教育機関および施設・機関の双方における実習教育の目的を中心として、指導内容や指導方法について検討がなされてきている。
- 2) 米本秀仁 安井愛美 「社会福祉実習に関する実習学生の評価について」『北星論集第27号』所収 1990
- 3) 池田雅子 米本秀仁 「社会福祉実習における評価について」『北星論集第28号』所収 1991
- 4) 山井理恵 「社会福祉現場実習における学生の自己評価」『日本社会福祉実践理論研究第8号』所収 1999

